

「メデイリック第3回」WORKshop

「クラシックスランプ」

登場人物

藤ノ宮

野彦

吏加

テオ・ポー

記者

ペイリー・チャイルド

財団

シロスコフ

※財団、記者、吏加、板付き

【L・明転】

「大きな家ですね」

「世界的な指揮者のご自宅ともなると……
すごいですね」

「あの天災指揮者・藤ノ宮大介を取材で
きるなんて、本当に光栄ですよ」

※吏加、登場

「先生の方、やはり難しいので、代わりに
私をご対応させて頂きます」

「あ、東京文化財団の石井と申します」

「ネイキッドライフの名古屋です」

「フジノオト秘書の吉井と申します」

「早速ですが……今回は日本のクラシック
史上最大規模のコンサートです」

「お断りします」

「え」

「え」

財団 「まだ説明が」

吏加 「別の指揮者をあたってください」

財団 「ちよっと待ってください……東京フィ
ルハーモニー楽団、ベルリンフィル、ニ
ューヨークフィルを始め10以上の世界
的楽団が一同に会します。こんなことは
他にありません」

吏加 「帰ってください」

奥から藤ノ宮の声が聴こえてくる

藤ノ宮 「吏加！吏加！」

※吏加、はける

「何だ。本人いるんじゃないですか」

財団 「せめて、直接交渉させて頂けないかな
……」

……

※吏加、登場

吏加、眼帯が増えている

記者 「大丈夫ですか？」

吏加 「はい、お気になさらずに」

財団 「せめて、先生と直接お話しさせて頂けないでしょうか？」

史加 「ダメです。お帰りください」

※藤ノ宮、登場

藤ノ宮 「ん？業者じゃないじゃないか。何だ、お前ら」

史加 「先生……」

財団 「先生！日本史上最大のクラシックコンサート
の指揮をお願いしたく参らせて頂きました！」

史加 「ちよつと……」

藤ノ宮 「そりゃいいね」

財団 「葉加瀬太郎氏、クリスティアン氏、ミッシャ・マイスキー氏など……一夜限りの最高の楽団を作りあげるつもりです！」

藤ノ宮 「クラリネットは？」

財団 「ペーター・シュミードル氏が……」

藤ノ宮 「へーあの老いばれがアジアまで」

財団 「この大楽団を指揮できるのは先生しかいません！どうか受けて頂けないでしょうか？」

史加 「お断りします」

藤ノ宮 「いいよ」

史加 「先生！」

財団 「ありがとうございます！」

藤ノ宮 「曲目は？」

財団 「先生に是非とも……」

藤ノ宮 「モーツァルト、なんてどうだろうか？」

財団 「素晴らしいと思います！」

藤ノ宮 「うん、うん、イメージが湧く……ベルリンフィルの音のカーテンに包まれるペーターの独創的なクラリネット」

史加 「先生」

藤ノ宮 「史加。クラリネット協奏曲をかける」

史加 「できません」

藤ノ宮 「早くしろ！」

間

史加、スマホを触る

「M・モーツァルト……」

記者 「すごい雰囲気……」

財団 「素晴らしい公演になるぞ……」

藤ノ宮、うとうと

財団 「先生？」

記者 「え？」

藤ノ宮、寝る

吏加 「先生！」

吏加、スマホで曲を止める

〔M・モーツァルト―CO〕

吏加 「先生、しっかりしてください！」

吏加、藤ノ宮を起こす

藤ノ宮 「は！俺は一体…」

吏加 「…寝ておられました」

記者C 「寝ておられましたって」

藤ノ宮 「…クソ！（殴る）」

吏加 「きやつ！」

記者 「ちよつ大丈夫ですか？」

藤ノ宮 「モ…モーツァルトは音に深みが足りな

い。ダメだ！」

財団 「そ、そうですね！モーツァルトは違う

なと思っていました」

藤ノ宮 「ベートーヴェンにしよう。吏加、第6

番だ」

間

藤ノ宮 「早くしろ！」

吏加、スマホを触る

〔M・ベートーヴェン―C〕

藤ノ宮 「ベートーヴェンの楽曲は俺が指揮を取

るためにある」

財団 「おっしゃる通りです」

藤ノ宮、寝る

記者C 「また寝てる！」

吏加 「先生！」

吏加、スマホで曲を止める

〔M・ベートーヴェン―CO〕

記者 「どういうことですか？」

吏加 「先生は…スランプに陥られているので

す」

財団 「スランプ？」

吏加 「見ての通り、先生は…クラシックを聴

くと眠くなってしまうのです」

記者C 「素人かよ」

吏加 「先生、しっかりしてください」

藤ノ宮 「は！俺は一体…」

吏加 「寝ておられたのです」

藤ノ宮 「くそ！（殴る）」

吏加 「きゃっ！」

記者 「大丈夫ですか？」

吏加 「私は大丈夫です」

藤ノ宮 「バツハだ！バツハなら俺の音楽への探

求心を満たすことができるはずだ！吏加！」

記者C 「すぐ寝るんじゃないのー？」

間

吏加、スマホを触る

「M・バツハーC」

藤ノ宮、即寝る

記者C 「すぐ寝た」

吏加、スマホで曲を止める

「M・ベートーヴェンC」

吏加 「…お帰り頂けますか…」

財団 「しかし…このコンサートを成功させるには先生の力がどうしても必要で…」

吏加 「沢山の方法を試しました。コーヒーを

飲むとか、薬物を摂取するとか」

財団 「そんな流石に」

記者 「違法です」

吏加 「違法かよ」

記者C

吏加 「効果はなく…お昼寝をするとか、そう

いうことも試しましたが…このスタンプ

から抜け出すことはできていません…」

記者 「あの藤ノ宮大介がクラシック聴いて眠

くなるなんて…」

財団 「異常事態だ…」

記者 「まあ気持ちは分かりますけど」

財団 「どういふことですか？」

記者 「え、クラシック聴くと眠くなりますよ

ね？」

財団 「…貴様、冒瀆してるのか！」

吏加 「この低級国民め！」

記者C 「こんな言われます？」

寝ぼけて目を覚ます藤ノ宮

藤ノ宮 「…チャイコフスキー」

記者C 「どんな起き方」

吏加 「先生！」

藤ノ宮 「お、俺は一体…」

吏加 「寝ておられました」

藤ノ宮 「クソ！（殴る）」

吏加 「きやあ！」

記者 「ちよつと！DV指揮者と記事にしますよ！」

藤ノ宮 「うるさい！お前に何がわかる！」

吏加 「先生、今回はお断りしましょう」

藤ノ宮 「黙れ！お前に何がわかる！やるぞ！俺は！ドビュッシーをかける！」

吏加、スマホを触ろうとする

藤ノ宮 「吏加、待て（財団へ）おい、俺に張り

手を入れる」

財団 「そんな、できません」

藤ノ宮 「クラシックの未来のためだ。頼む」

藤ノ宮に張り手を入れる財団

藤ノ宮 「吏加」

吏加 「はい」

吏加、スマホを触る

「M・ドビュッシーCO」

耐える藤ノ宮

財団 「ず、素晴らしい指揮だ！」

吏加 「先生、寝てはいけません！寝ちやダメ！」

藤ノ宮、力尽きて寝てしまう

財団 「あーダメかー！」

吏加 「先生…」

吏加、号泣

吏加、スマホに触る

「M・ドビュッシーCO」

記者 「起こさなくていいんですか？」

財団 「お願いします」

記者C 「えー俺ー？」

藤ノ宮に声をかける記者

記者 「ちよつと……」
藤ノ宮 「俺は一体……」
記者C 「大体もうわかるでしょ」
藤ノ宮 「……あれ？吏加……吏加！？」
吏加 「ここにいます」

わざわざ吏加の所へ行って暴行をふるう藤ノ宮

記者 「だからやめろって！」
藤ノ宮 「……畜生……俺は……俺は……」
吏加 「先生程、クラシックと向きあわれている人間などこの世にいないというのに……」

記者 「もしかして、クラシックばっか聞いているから頭がおかしくなってんじゃないの？」
財団 「クラシックは頭がおかしくなる音楽ではない！」

記者 「流石にずつと聴いてるとき」
財団 「素人は黙れ！」
藤ノ宮 「……お前に何がわかる！」

財団 「え」
藤ノ宮 「確かに俺は毎日、クラシックを聴いていた……。別の音楽に触れていなかった……。試してみよう。吏加」

吏加 「何を？」
藤ノ宮 「任せる」
吏加 「……はい」

スマホを触る吏加

「M・B＼愛のままにわがままに 僕は君だけを傷つけないーCー」

記者 「ビーズ！」

藤ノ宮、軽快に指揮を取る

藤ノ宮 「取れる！取れるぞ！」

記者 「取れます！取れますよ！」

吏加 「先生！」

藤ノ宮 「吏加、見てくれ！どうだ！」

吏加 「素晴らしい指揮です！」

藤ノ宮 「そうだろう！私の指揮で稲葉がシャウトの雄たけびを上げるのが見えるだろう！」

吏加 「見えます！」

藤ノ宮 「松本がギターをかき鳴らすのが見えるだろう？」

吏加 「見えます！」

藤ノ宮 「よし、稲葉と松本を呼んでくれ」
財団 「稲葉と松本は違います」

吏加、スマホで曲を止める

〔M・C O〕

藤ノ宮 「あの役立たず！」

財団 「別の方に依頼させて頂きます…」

藤ノ宮 「おい！待ってくれよ！」

財団 「だって無理でしょ！」

藤ノ宮 「もういい！もう怒った！指揮者やめる」

吏加 「先生」

藤ノ宮 「バンドやる。俺はバンドマンになる。

バンドマンになって女と遊ぶんだよ！
女！女！」

※藤ノ宮、はける

吏加 「先生が…バンドマンなんかになっちゃった」

記者 「まあ、音楽は音楽ですから」

吏加 「あなたに何がわかるんですか！バンドマンなんか…バンドマンなんか…」

「女」と連呼しながら駆け抜ける藤ノ宮

記者C 「もう俺には何もわからん」

【L・暗転】

—了—